

〔巻頭言〕

「^{まど}惑わず」とは、できぬままの臨床

札幌学院大学大学院臨床心理学研究科 井手正吾

今年も3月に、心理臨床センターでケース担当を始めとしていろいろな経験を重ね心理士としての研鑽を積んでいった大学院生が、それぞれにいろいろな臨床現場に巣立っていき札幌学院大学大学院の修了生に名前を連ねていった。この紀要が刊行される予定である夏頃は、新たな活躍の場によく慣れながらも、臨床のことで迷い、苦しみ、落ち込んだり、時に楽しみ、よろこんだりしながら、それぞれの臨床現場でそれなりに精一杯に心理士としての歩みを進めていると思う。

悩み苦しむ不安定な患者・クライアントを適切にアセスメントし治療的介入をおこなっていくためには、臨床家は「惑わず」に患者・クライアントに対峙していくことが重要といわれる。堅実なる臨床的知識をもとに客観的な見通しをもち冷静沈着で、かつ誠実で純粋な暖かい態度は、臨床家としての理想とされたりするところでもある。EBMや実証的な根拠に基づく科学の動向から発展した認知行動的な理解や処方、「惑い」をなくし、臨床家に精神的な余裕を拡げてくれるだろう。その関与により患者・クライアントも「惑わなく」なり快復・治癒する人は多い。だが、人間の悩み・苦しみ等もさまざまであり、「惑い」続ける患者・クライアントも少なくないのも臨床的事実である。

「惑わず」ということは、確かに臨床でも大事なところであろう。しかし、Freud.S.をひくまでもなく人間の心は複雑怪奇で、「惑い」というのもそう単純明快ではない。臨床家も患者・クライアントと同じように、「惑って」つきあっていくことも心理臨床では意外に大切なのではなからうか。

「惑わず」の齢をふたまわり近くもこえた一臨床家である私は、今でも患者・クライアントに会う時は、いつも緊張し迷いながら自信ももてぬままに関わっていく。もちろん、「惑い」ながらであるから、それなりの星霜を重ねた知識や経験を総動員しながら懸命にやっている。また、スーパーヴィジョンにおいても「惑わず」にはやれない。私と比べるとずいぶん若いヴァイジーと共に迷い悩みながら、患者・クライアントの理解やより好ましい関わりについてあれこれ思いをめぐらせている。

なんとも頼りない治療者であり、ヴァイザーである。そのためか、当てになりそうもないと見かぎって、他の治療者やヴァイザーへと乗りかえていく者もいる。しかし、意外に少なくない患者・クライアントがそれなりに少しずつ上手くやれていったり治療面接から卒業していく。また、ヴァイジーは大きく成長し幅を拡げ臨床家として感心させてくれるようになる者も少なくない。人間のもつ自己治癒力や成長力というものすごさを感じさせてもらい、ありがたく思うところである。

独断的になりやすい私は、患者・クライアントとの関わりを通じて個々の臨床的事実を大事にして理論や技法を築いていったFreud.S.をはじめとする臨床家を敬愛するところである。また、自分に甘く怠け者であるので、そのような偉大な先達を臨床家としての自分の憧れとして、不器用でもあるので自分なりに必死にやってきた。そのような先生達が、言を異にするかもしれないが、分からないことを大事にすることが適切に分かることにつながることや、劇的に良くすることではなく悪くしないことが治療の基本、というようなことを言っている。我田引水となるのかもしれないが、私の「惑い」もそう間違っていないのではないかとってしまう。

今年巣立った修了生をはじめとして、資格問題等いまだ先の分からない日本の心理臨床を背負っていく若い心理士は、いろいろな「惑い」をもっている者も少なくないと思う。もちろん若い者ばかりでなく、「惑い」をもっている心理士は、その「惑い」をそれぞれの成長の糧として欲しく思う。

「^{みみた}耳順がう」ことができる齢を重ねているはずだが、それもままならず、まだまだ「^{のり}炬を躰え」てもかまわないと居なおし、「年寄りの冷や水」であろうが私も今なお臨床に精進したいところである。